

# 保姆の教養

倉橋 惣 三

時局に於て幼児保育の重要性は益々その大を加へる。之が爲に、施設の擴張充實、又研究の進歩、精深が必要になる。しかも教育は常に人にあり、保育に於て又特にそうである。幼稚園教育者の自己教養は、常に一刻の油断なく精進努力されてあるところであるが、この時局、保育充實の他の方面が著々として講ぜられんことを當つて、その第一根柢をなすものとして幼児教育者の教養が一層重要になるのである。そこで此のことに就いて幾つかの方面から考へて見なければならぬと思ふ。

教養を云へば、如何にも何か特別な生活行事の如くにも考へられたりするが、それが生活日常の間にあるものであることは云ふまでもない。殊に日々にその實際に従事する者が、その實際としての教養を擧げて行くに於て先づ、その實際の生活體驗を主としなければならぬことは一層言を俟たぬ。魚は水中に於ていよく生き、鳥は空に於ていよく生きる。幼児教育者は、幼児の間に於て最も眞に己を生かす。若し教養の名に於てその日々の實際體驗を假りにも虚しうするが如きことがあつたならば、それは教養の邪道である。たゞ幼児教育者に於て、幼児教育者の實際は餘りに平生であり、従つて屢々特殊の新鮮感を缺くことが少しも云へない。新鮮感を缺くことが過言であることすれば、餘りに常のことに於て捕捉の機縁を逸するの傾が無いとも言へない。そこで、その平凡に空過せられるかも知れない日常に對して、これを眞に自己を生かすの道とする點に於て細心の留意が必要になる。但し斯く云ふことは、自己教養の爲に保育すること云ふのではないことはもとよりである。寧ろ一切の意味に於て自己を忘れたるところにのみ眞の保育が實現しうるのであつて見れ

ば、留意する云ふも實は保育に専心することに他ならぬのであらう。たゞ専心は即ちその時のことであつて、そこに自ら眞に自己を生かす道があるのであるが、之れをほんまうに自己のものにし又自己の發展の力にするものは、反省によらなければならぬ。即ち體驗及びその反省である。殊に幼児の保育に於てはその淡き接觸の裡に、又過ぎ去り行く些々たる生起の間に、人には知れない悦びと悲しみとが經驗せられるものである。人に云ふに足りないことであつても、そのこと吾れ云ひかへれば、その子に於ける我としては非常な悦びを感じるべきがある。人に語つても理解されない程のことであつても、その子に於ける我としては誠に悲しく誠に濟まない云ふやうな感じもすることもある。之等の感じは經驗そのものについてゐるものではあるが、味はひかへすことなしにほんまうに自分のものとはならない。如何に多くの人々がたゞせはしなく、たゞあくせく経験から經驗へに移り、又追はれてこれを味はひて感ずるべきなき場合があることであらうか、これに反して何等の眞實なる専心の體驗なくして、たゞ感じにのみ己れを上ずらすることの價値なきはもとよりであるが、折角の體驗を味にまで噛みしめることなくやり過してしまふのも惜しいことである。そこでこの反省は必ずしも常に深刻なるもの云ふのではないが、恐らく經驗に於て己をへりくだらしむるものであらう。濟まないと思ふべき悲しいと思ふべきであることはもとよりして、むしろそれ以上に眞の嬉しさに、その子への眞の嬉しさに自己をへりくだらせるであらう。思ふに教養の第一義は、このへりくだりにある。へりくだりに於て自己の淨化がある。自己の淨化におそらくや發展の機會がある。しかも、己より優ぐれたるもの、殊に屢々教養の對象とせられる理想の前に自己をへりくだらすことは必ずしも難くない。その意味での、教養は謙遜なり。云ふことは改めて云ふ程のことでもないのである。幼児保育者は己より小さきもの己より劣れるもの、その前に、自己の謙虛を感ずるのである。しかもまた如何に多くの幼児教育者は幼児の前に或は傲然たり、或は傲然でもない程に平然たり、而うして自ら遂に發展せざるかを思ふ時、この經驗の正しき反省の價値を思はざるを得ない。

この反省は何時その人の心に起り來るに限りない。若し起り來るべきがあつた場合には、それを粗末にすることなく、心に呼びかへさねばならない。しかもこの反省の最も好適なる場合は、幼稚園に於ける、幼児が歸つたあとの暫くの時間

である。或人は幼稚園の玄関に立つて歸りゆく子の後姿を見送るであらう。その時、朝からの経験のいろ／＼がつゞ湧き起るこゝを禁じ得ない。或人は自らの椅子に歸つて、獨り靜かに今歸つた子ぎもが、ぎの道をどう行きつゝあるかを追ふて見るでもあらう。その時に共に居た時の感じは別なる感じをもつて、その子を抱くこゝ云ふよりも追ひかけた氣持もするこゝもあらう。あの時の我ながらの適切なる態度に、こゝ云ふよりも、その時に現はした子供の笑顔にほゞ笑ましさを獨り感ずるこゝもあらう。椅子に堪えない程立ち上つて、あの時の我が心なさを身に恥ぢ、子に詫びる思ひの抑へ難きこゝもあらう。忙しい用は長くこゝいふ時間を與へない。しかもこの種のひき時が、ぎの位その人を幼児教育者として日々高め深め、豊かにしてゆくこゝであらう。少くも折角の己が生活を、たゞ追はるゝ如き生活として、外にのみ出る生活として、内にこゝり入れる體驗をなし得たる場合も多大の差異があるであらう。兎に角、幼児教育者の自己教養の第一はその本務の裡にあり、これをよそにしてはカラ教養である。

以上は、保育の實際の上に於ける體驗をその反省であるが、次には子供等の持てる純真無我なる性情の感化による教養がある。この點は、子供より學べし云ふ意味に於て誰も知るこゝろであり、云ふこゝろである。又事實として久しく幼児の間にある者が、その點に於て吾知らず受けて居るこゝろの教育價値は少からざるものである。但しこの際に於ける感化の受け方は特にその美點長所を認識するだけで出来るものでない。それはむしろ兒童感そのものを養ふに足るだけのものであらう。それよりも、前にも述べたる如く吾知らず受くるこゝろに感化も大なるものがある。しかも受くるこゝ云ふこゝは、この際單なる受け身の生活にて終るべきものではない。こゝまで子供の中に同化し得るかをもつてその要諦とする。化せらるゝこゝをなしに同化するこゝは出来ない。同化するこゝをなしに化せられるこゝは出来ない。こゝに極めて六ヶ數き點がある如くであるが、このむづかしさを打破するものは吾知らずである。吾知らずはこの場合二つのこゝによつて起る。一つは子ぎもの持つ所謂可愛らしさに引きづられてゆくこゝによつて、一つは子ぎもの生活の必要に對する實際の世話によつて、この中所謂可愛らしさに惹かるゝこゝ云ふ言葉は、美しき肌の軟かなる幼兒を豫想するかに聞こへる。それも又可なりであらう。併しこゝに云ふ意味は所謂兒童の理想性に於ける美點の外に、極めて非理想的なる實際の動作實行

の裡に、どんな子にも子さもらしさで惹きつけはあつたものである。むしろ、餘りに理想美をもつて望む時に、子さもは案外に我がまゝであり、小憎らしくある。たゞその場合に於ても、何さなく子さもらしさは見出されざるを得ない。尊敬する云ふよりも、或はむしろ侮つて居る趣きかも知れないが、それでも惹きつけられないに勝るこゝ大であらう。

第二の實際の世話に至つては、その所謂實際に於て、いわゆるチャーミング云ふ如きこゝは大いに異なるのである。うるさくもあらう。面倒くさくもあらう。厄介ではもごよりあらう。しかもさういふ感じの如何に拘はらず世話の形に於てしばらくは自分がその子のものである。チャームは時に弄び心ならぬ限らない。それよりもむしろ世話の方が堅實であり、眞面目である。兎に角この二つによつて、子さもに一步步惹きつけられてゆく、同化されてゆく、感化されてゆく。その際、必ずしも幼児の本性に關する理想的認識が明らかにされてゐる云へないのであるが、子さもと吾等の距離へ一步步近づけられてゐるのである。子さもの純性から感化を受くる云ふこゝは、時に極めてロマンチックなる或は理想主義的な意味に於て云はるゝこゝが稀ではないが、それよりもむしろ子さも云ふものゝ爲に傍に居る大人としての現實の關係に於て本當の感化を及ぼされざるに相違はないのである。子さもと共に遊ぶ云ふこゝも、子さもに同化し子さもに感化せらるゝ極めて有效なる場合であるに相違はないが、たゞこの方面のみが多く擧げらるゝのに對して、むしろ、子さもに何ものかを見出すこゝも、子さもに何事かを盡すこゝによつて、吾さも識らず子さものものさなるこゝをより眞實なるものさ見たいのである。

## 二

前に述べたるこゝによつて、幼児教育者はその實際の職務と其の平生の對象たる子さもによつて、幼児教育者として教養せらるゝのである、しかもこれ等の純實際的な方面に加へて必要なるものは、研究であり、讀書であらう。今日の幼児教育者は昔の幼児教育者に比べて、讀書によつて自己の専門者としての教養を備へてゆくのに極めて便利なる時勢にある。言ひ變へれば、讀むべき書、聞くべき話が決して少くない。殊に昔は幼児教育のこゝが極めて狭く、原典の幾種かに限らるゝの感さへもあつた。限らるゝ云ふ意味は、それだけが幼児教育者を教へて他の一般教育學、一般心理學その

他關係ある一般精神科學が全く保育圏外にあるものであるかの如く見られた。その場合、その研究讀書の限定範圍なるものは教養に便であり勞が少いとも云へるのである。又それだけに教養の専門家的教育の入口が極めて狭いものであり、今日に於て幼児教育は、あらゆる教育科學の全面的背景と關係と錯綜との中に置かれてゐる極めて廣い間口が、その研究に直接に資するのである。こゝに一面から言へば讀書的教育の範圍の極めて無限なるを思はしめるのもあるが、又如何なる方面の研究讀書と謂も皆以つて保育研究の資材であると言ひ得るのである。

さてこの讀書研究については、たゞそのこゝにのみ没頭して居られる學生の場合と異り、即ち幼児教育者はその實務に於て激忙であり、極言すればいくらでも次々の仕事に寸暇を得難いのである。従つて、餘程特別な留意と工夫を用ふるこゝもなくしては讀書の機會は得られないのである。こゝに於て、讀書計畫の必要が起る。之は如何なる方面の業に従事するものに於ても同様であるが、殊に幼児教育の如き方面に於ては、その必要が一層大である。試みに多くの幼児教育者に、讀書研究の必要を痛感して、而かも敢へて怠るゝ云ふにあらすして、殆んゞ書を手にするこゝなき週々月々年々を過すのではあるまいか、殊に、困るこゝ々云ふもおかしい言ひ方であるが、それですんでゆくこゝろに幼児教育の事業の特殊な點があるとも云へるのである。仕事によつては決して讀書研究なしに自己の業を充實させてゆくこゝが出来ないものが少くない。同じ教育の業に於ても、例へば小學校教育者は、日々共に進歩する教育方法上の研鑽に就てうつかりして居られない。中等學校殊にそれ以上に於ては、教材に於て自己に絶えず仕入を必要とする。幼児教育に於てはその方法に於ても内容に於ても、極めて不用意に濟ませることが出来、繰り返すことが出来る。言換へれば讀書研究の有無が直接には何等の痛痒を自己に感ぜしめずして濟むのである。こゝに幼児教育者が特に讀書計畫の必要なる所以が起る。この計畫に就ては、その人の學的程度と、現在の多忙の關係とによつて必ずしも同様の方式を強ひるこゝは出来ないが、若し一日何頁、一月何冊と云つたやうな多少機械的な方法でさへもが大いに役に立つであらう。而してその内容に就いては、幼児保育、幼兒心理の直接なるものもさより、その大きな水源地帯と云ふてもよい如き教育思想、教育科學、一般人性研究等がその計畫の中に按配せられなければならない。元來讀書はそれが直ぐに自分の實際の生活の上にさう現れると云ふも

のではない。時にそれが何等關係を持たずして過ぎ居らるゝ如く見ゆることも少くない。併し、恐らくこれによつて、されだけ充されるかは目立たないにしても、これなくしてきただけ缺けてゆくか言ふことに至つては顯著なるものがあらう。世には相當の長い保育経験を持ち又優れたる保育技能を持ち、殊に日々の熱心なる實際を有しながら、さきこなく自信に缺け、自己の據り所に於て頼り無さを持つてゐるが如き人がある。これは、自分の経験が自分の讀書経験を並行しないからである。経験が幼稚簡單であつた場合には僅かながらに持つところの讀書経験がそれと並行し得たのである。爾來経験の進むと共にその割合に進まない讀書研究が、その稀薄感を生じ來ることは免れ難いことであらう。

然らば今日の讀書計畫に於て、特に如何なる方面が必要とせらるゝか、之に答へて二つのことが言へる。一つは進んでゆく教育科學の各方面に於て、所謂日進月歩の新資料を提供し得る方面である。しかももう一つは、人類の眞に大きく歩み來つたところの教育的足跡、殊にそこに培はれたる根深き根據、こゝにいふ方面に於ての研究が一層必要なのであるが、少くも今日の一般幼児教育者に最も缺けてゐるのがこの點ではあるまいか、多少の新知識によつて却つてさきこなき輕みこ淺さこ小ささ様のものを感じしめる點がこの缺陷から起るものであるまいか、この爲に、先づ勵めたいのは相當に精しさを持つ教育史の研究である。教育學の研究によつて得るところも多に相異なるが、時としてそこから得るものはさう考へるかの精しさ或は系統に過ぎなかつたりする。

それも大事なことであるが、それが何故に今日の吾等に必然であるかの事實を與へるものは教育史である。幼児教育者の中に例へばフレーベルを知つてゐる人は少くないであらう。又之を批判する人も少くないであらう。しかも教育史の中に於てのフレーベルを知らないが爲に教育の流れの上から見て屢々獨斷に終る。フレーベル以前にありしものをフレーベルに於て驚き、教育史上の訂正に過ぎざるものをフレーベルの獨創とし、遂にフレーベルを知つて教育を知らず云ふやうなこにもなる。フレーベルの大なるをもつて尙然りすすれば、他は言ふまでもない。但しこゝに一言することには、教育史の研究によつてたゞ史的事實を知るここの價值を言ふのではない。又、今の自分の立場を教育史上の關係に跡づけるここのに於ての價值を云ふのでもない。それよりもむしろ史觀を養ふにあり、言ひ換へれば自分の一切の考を大きな教育の流

れの中に置くことを練習することにある。その結果は毎日して居ることが幼児の相手であり、お手々つないでの遊びであり、子どもの小さき手を洗つてやることであり、しかもそれが教育云ふ人類の總意の中に根を持つものであり感じ得ることである。稍々奇妙な例であるが、如何なる末梢に當る言へきも、根のつながりを持つ時に決して自己の頼りなさを感ずるものでなからう。今日幼児教育者の中に、時に最も新しき研究に優れた人も少くはない。たゞ史觀の上に自己の事業を立脚させて置くことが少くも力強いと言へないのでなからうか。必ずしも、幼児教育に關する史傳のみ云ふのではない。教育の大きな總意の把握を勵めたいのである。但しかく言ひながら日々新しく考へられてゆくこの道の新研究を見落してゆかない用意の必要なことは言ふまでもない。

### 三

本務の忙しい中に於て専門の讀書研究をするだけでも時間は足りない。併し更に専門のこゝ以外にもその讀書の範圍を廣げてゆく必要がある。蓋し讀書は、滋養であり、滋味であつて、範圍の廣いところにその價值があるからである。殊に幼児教育者は専門家でありながら専門家でないことも云へるのであつて、廣い教養によつてのみ子どもを導くことが出来るからである。その廣い讀書の中で、先づ第一に擧げたいのは文學である。文學は小説又は詩等その種類を問はないが、人間のこゝ、自然のこゝ、社會のこゝに對して單なる知識としてではなく、その味はひを傳へるものとして大きな力を持つて居る。殊にその中には、子どもを主題させるものも少くない。この種文學に於ては、心理學或は教育學の學術的書物が與へてくれる子ども以上の子どもを、その生きた姿に於て示してくれる。幼児教育者は常に子どもの中にあつて今更子どもを文學者によつて示さるゝ必要はないやうでもあるが、教育者は二つの點から屢々子どもを見落して居る。一つは餘りに常に子どもの中にあるこゝによつて、その新鮮なる印象を失ふのである。恰もよき風景の間にある者がその風景の美を感じないのと同様である。勿論感ずる以上に味はつて居る云へば言へるのであるが、これを新鮮なる印象に於て潑刺たる表現に於て見直させて呉れるものは文學である。更にまた、實際教育者は、教育の目的に於て子どもを見るこゝの設なるが爲に、子どものあるまゝをそのまゝに於て見るこゝを失ふ危険も少くない。之に對して文學は敢へて特別な期待を

持つことなく、況んや勝手の注文を持つてすることなく、子ぎものあるがまゝをそのあるがまゝに於て見る。またそのまゝに卒直に表現する。之等のことは、繪畫彫刻等の藝術に於ても同様であるが、それ等に於てはそれを見抜いてゆく特別な鑑賞眼を必要とする場合が少くない。文學に於ては、より容易にその示唆を受けうるであらう。かく云へば、幼児教育者に勸むべき文學が子ぎものを繪けるものをもつて中心とするかの如く聞えるが、決してそれに止らない。前に述べた如く、文學はものを正しく見ると共に味ははせるものである。人間そのものに關する味はひを持ち、味はひを求むることなくして一日も人間を導くことは出来ない。蓋し教育者は人間に對する優れたる味覺の所有者である。殊に幼児教育の場合に於ては、その對象の示し來る人間味が極めて淡いのである。餘程優れたる人間味覺を有するものでない限りこれを味はひに於て觸れてゆくことは難い。その人間味覺(必ずしも人間的のみに限らないが)を養つてくれるものが文學である。この意味に於て幼児教育者に人間を畫いた最も良き文學を勸めず居られない。

更に讀書研究の範圍を廣げ得るならば或は倫理、或は社會學、尙ほ進んでは人生哲學にまで及んで幼児教育者の人間研究を何處までも深くすることを求めたい。前に教育史の研究を勸める場合に、往々にして幼児教育者の教育觀が、斷片的であり些末的であり淺薄であることを云つたが、人間觀に於てまた同様のことが云へるであらう。但し、これ等の方面の書をよんで、その單なる究理的興味に深入りすることは、こゝに期して居る點ではない。その書は理の考へ方であり、理の表現であるにしても極めて人間的なる幼児教育者に對しては渾然として理を離れたる生きたる社會であり人生であるやうに受け取らなければならぬ。書をよんでジレットタントになることは讀書人そのものさしても必ずしも正しい道でないが、教育實際家としての讀書に於て殊にそうである。以上各方面に互つて讀書研究を勸むることは時間に於ても努力に於てもまた之を解するの力に於ても極めて容易ならざるやうにも感ぜられる。書物を机の上に積み並べて茫然として眺むる習慣に落ち入つた場合には殆んど手の下し所がないやうにもなるものである。併し書は、讀書することに於てその道が開かれる。時間も出來てくる。勞も輕くなつてくる。解釋もまた必ずしも難くなくなつてくる。昔の人が云つたかき思ふが「書物は友人である」或はもつと親しい關係であるかも知れぬ。こちらで接すること多きに從がつて本の方からも親しみ來



るが如き感を與へる。讀書しやうを考へるこころなく、著々として先づ一冊を讀むべきである。吾人は屢々何を讀まうか云ふ質問をうけるこころがある。一月經つて又同じ質問を受けるこころがある。勿論さうせ讀むならば充分選擇してもらつたものを讀んだ方が賢明ではあらう。併し書物は兎に角も手當り次第云ふのも甚だしいが、先づ一冊を讀むこころによつて次の讀書が示されてくる。書物は友人の如し云つたが、同様に讀書は社交の如し云へやう。一冊の本は必ず幾冊かの本を紹介しまた誘ひ來るものである。即ち要は一刻も早く一冊の本、書を讀み初めるこころにある。

#### 四

今、繪畫彫刻のこころに觸れた。それは子をも主題とするものに就て言がそこに及んだのであつたが廣く藝術に觸れるこころは幼兒教育者としての最も大切なる教養法の一つである。一つには、情操を主として生きてゐる幼兒達を、その生活の特性に於て正しく導いてゆくには、さうしても幼兒教育が絶えざるうらほひの心の軟かさを持ち續けねばならない。文學はこれを補つてくれるものであるがまだその意味が中心となる傾を持つ。文學そのものに於てさうでないにしても、之を讀む者の傾向に於て或は考へさせられたり、或は批判的になつたり、味はふ云ふも極めて意識的になつたり、さうゆう傾を免かれない。文學の純藝術性をその構成文章に言語のリズムに於て感じ得る云ふやうのこころは、必ずしも誰にでも容易に出來る云へない。之に對して藝術は意味よりもその藝術的なるこころに於て吾々を養つてくれる。殊にその中でも音樂はさうした意味に於て吾々の心に直接のうらほひの軟かさを與へてくれるものである。若し幼兒の生活とその心の動き更に恐らくやその身體の動きさへも之を最もよく表現しうるものは音樂であらねばなるまい。幼兒は藝術的だ云ふこころを更に深めて云へば、音樂的だ云へるのである。従つて之に觸れてゆき得る前に、吾々が音樂的に教養せらるゝこころが好都合である云はねばならぬ。人は自分の心の波打ち方によつて物を觀るものである。幼兒教育者中の若き人々が、屢々極めて低俗なるリズムに心を鳴らすこころによつて、その心の騒がしさを以つて幼兒を觀るこころがあるのは最も遺憾とするこころである。吾々は良き本を讀まねばならぬ。良き繪を見なければならぬ。しかも最も嚴密に選ばねばならぬのは良き音樂である。それはたゞ所謂音樂趣味を高下せしむるに止らず、吾等の心の波打ち方の様式を高尙にし

或は卑俗にするからである。例へばジャズの俗樂に馴るゝものは、子ぎもの世界をジャズ的に感ずるに至る。或は低級なるメロデーに養はるゝものはその低級さに於て子ぎもの生活をうけこるに至る。この點は極めて微妙なる問題として教養上の注意點となつてくるのである。

## 五

最後に、こうした一般のおそらくや平時的なる教養の心掛の他に、今日の日本の幼児教育者として時局に關する認識を精しくすることは缺くべからざる教養の重要點である。時局の問題は單なる時事には止らない。又世界の動きの廣き興味を云つたやうのものには止らない。又一つ々々の戦の局面の變化に對する知識に止らない。一切を通じて國家的に精神を集中し昂揚し激動せしむるこゝである。これなくして眞に時局を認識するこゝへない。又これなくして眞に今日に於て日本の子ぎもを教育しつゝありこゝへない。但しこの點については、この教養論の中に於て特に云ふを要しないであらう。しかも或は若き保姆諸君等の中には、その日の朝の新聞を讀むこゝなく、或は、その夕のラヂオのニュースを待ちかまへるこゝなく、單に教育の超然性から超然性へ動いてゐる如きこゝが無いこゝ限らないかも知れない。これは一面に於ては本務に忠にしてその他を顧り見ないこゝ云はるゝが如きでもあるかも知れないが、この緊張せる貴重なる時局下に於てそれは許せないのである。勿論さうした大人の時局認識がそのまゝ子ぎもに語り傳へらるべきものではない。或はその日の保育の實際に於ては必ずしも時局認識を何等關係なきが如き様を探らなければならぬこゝも少くはないであらう。併しその幼児教育者の中心に嚴肅なる時局認識があるこゝは、それがさういふ形で云ふこゝでなく、況んやさういふ觀念に於て云ふやうなこゝでもなく、その教育の實際に現はれないこゝはない。幼児教育に於て人間の教育の特質を擧げてゆくこゝは容易であり、國民的教育の特質を擧げてゆくこゝは或意味に於て必ずしも容易でない。少年青年の場合の通りのこゝを行つていゝのならばこゝに角、幼児の性情に於て之を養ふこゝは觀念的に養ふが如くに容易ではない。しかも今日は時局が凡ての幼児教育者の毎日の心を國家的に高調せしめて居る。その言ふ言葉がやさしく、その言葉の内容があざけなく、その節が軽いこゝしても、こゝかに洩れ來るその調子の高さは、平生以上の響きを子ぎも達に與へずにおかないであらう。或

る朝、子どもは先生の目にその調子の高い閃めきを見て驚くことであらう、その先生の言葉に調子の高い響きを聞いて驚くことであらう。先生はその時時局教育をしゃうご必ずしも試みて居るのではない。たゞ、子どもと共に子どもの中に子どもを爲に生活しやうごして居るのであるが、時局の認識は先生自體をそうした國家的高調の存在にして居るのである。幼児教育者が幼児教育者としての教養の爲に、時局の認識を必要とするご云ふやうな言ひ方は、極めて意味をなさない。時局認識は子どもの教育の爲なごではない。もつご云へば自分の教養の爲なごでもない。時局そのものゝ中に自ら熱せられて來、自らはげまされてくるだけのごである。たゞもまた用意の如何によつてその結果を異にするごころがないでもない。この意味に於てつごめて時局に對する理解を深くし精しくするごを教養の一内容ご心掛けてゆかなければならぬであらう。

## 六

今更改めて幼児教育者の教養を説くのも不要の言であるやうな氣もする。併しながら、最初に言へる如く、この幼児教育が尊重せられ來る時に於て、その中心たる幼児教育者の實質の向上は一段の力を加へられなければならないのである。今日、保姆養成の年限が一ヶ年に止るを不満とするは、萬人一致するごころである。又保姆養成の機關が、他の中等教員養成の機關以下にあるが如きを引き上げなければならんごするのも多くの人の一致するごころである。若しそれかくの如くして養成の道を高める急務がありごした時、現に既に幼児教育者たる人々にしてこれに相當するごころの價値充實、實力増進の途は、同様の切實さを以つて深思せられなければならない筈である。それだけの高さに於て幼児教育者の最低標準とするごの論に對して、ごごまでの高さが幼児教育の現在の従事者に於て繼續建設せらるべきかご云ふごも、併行するごころの論でなければならぬ。後より來る者の爲にその養成の程度を高めるごごが必要である如く、今あるもの既にあるものが不斷の努力によつて自己を高め凡ての自己を高めるごごによつて、我が國の幼児教育者そのものゝ標準を高めるのでなければならぬ。今更らしく幼児教育者の教養に就いて贅言せる所以である。